The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	日・英語のていねい表現をめぐって
Author(s)	松田, 陽子
Citation	待兼山論叢. 日本学篇. 1983, 17, p. 5-19
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/56527
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

日・英語のていねい表現をめぐって

松　田　陽　子

1. はじめに

日常我々が使用している言語の機能を考える時、単に話者の内面を表出し、伝えるというような機能のみならず、メッセージの受け手との間の人間関係を配慮していることをも表わし、それによって関係をスムーズにする人間関係機能も作用していると考えられる。(1) そこで、伝えようとするメッセージをどのように表現するかという言語運用上の問題に直面する。伝えようとするメッセージを文法的に正しい文に構成するだけなら、何十種類もの表現が可能であるが、ある特定の発話の場面に適切なものを選択することが社会的に要求される。その適切な選択を誤ると、内容を伝えることには成功しても、人間関係機能がマイナスに作用することになる。すなわち、話者が、その発話行為の不適切さによって、メッセージの受け手にマイナスの印象を与えることになるということである。特に、外国語として言語を習得し、使用する場合、あらゆる場面にそれぞれ適切な表現を選択することは非常に難しい。というのは、文法的なものもそうであるように、母国語の習慣に影響されるからである。そして、それが母国語による影響からくる不適切さであることは、その言語についての知識の無い人にはなかなか理解されにくく、ネイティブスピーカーである聞き手に、マイナスの印象を与えてしまいがちである。そこで、異文化社会における言語の人間関係機能の作用の側面の違いを正しく理解することが、外国語を正しく

運用する能力の必要条件であると考える。

本稿では、まず、日・英語の言語表現のていねいさをめぐって、その表現選択の要因を考える。つまり、ていねいであるというのはどういうことか、そして、どういう程度のていねいさをどういう場合に、どう表現するか、その表現選択に影響を与える要因を、日本語・英語について検討する。特に、聞き手に対する働きかけが強く、ていねいさが顕著に現われやすい依頼の表現を中心に考察する。その考察を通して、ていねい表現選択に影響を与える社会的・心理的な人間関係についての配慮の規範の違いに光を当ててみようと思う。

ただし、英語社会については、たとえばアメリカとイギリスではかなり規範の違いもあり、表現も異なると思われるが、本稿では、あくまで、日本語との相対的な関係でのみ取り扱うものであり、入手可能な資料、インフォーマントの関係から、一般的と思われるアメリカ英語[(2)]を主な対象としていることを断っておかねばならない。

2. 日本語のていねい表現における配慮

たとえば、たばこを吸おうとして、灰皿が無いことに気づき、灰皿を持って来ることを頼む時、それが、かなり封建的な家庭の夫婦間であれば、夫が妻に、「灰皿。」と言い、妻が「はい。」と灰皿を持って来る。逆に、妻が夫に「灰皿。」と言って灰皿を取ることを要求することは不適切と見なされる。これは、夫の方は妻に対して、自分のために行為を要求する権利がある立場にあると考えられているからで、妻の方もそれを了承しているわけである。「灰皿は？」という表現になると、表面的には「灰皿はどこにあるのか」という疑問の形になっているわけだが、「灰皿が無いから持ってきてほしい。」という要求になる。こういう表現は、もちろん、非常に日常的なことがらについて、その日常性と、聞き手がすぐその表現意図を理解しようと

する協力関係にある場合で、その求められていることに対して、ノーという答えをほとんど予期しない場合に発せられる。最も一般的な、対等に近い立場の表現は「灰皿取って。」という表現であろう。これも、一方的な命令に近い表現であり、相手の気持や都合や面倒をかけることに対する配慮や気づかいをほとんど表わしていない。このような表現は、あまり「ていねい」とは感じられない。「取ってください。」という表現は、文型的には「取って。」よりも敬意的であるが、実際には、上司に対して「灰皿を取ってください。」とはあまり言わない。上司の方が、部下に対してそう言う方が自然である。「〜てください」という表現は、フォーマルな語調であるが、相手の気持ちに対する配慮が欠けている点では、じゅうぶんていねいな表現とは言えない。

上司の家で、上司に対して灰皿をとってもらうよう頼む場合なら、「あのう、すみませんが、灰皿はありますか。」とか、「すみません、ちょっと、灰皿が無いんですが。」とか、「ちょっと、灰皿をお願いできないでしょうか。」とか、「すみませんが、灰皿取っていただけませんか、恐れ入ります。」とか、又は、「たばこを吸ってもよろしいでしょうか。」と聞いて灰皿のことに気づかせるように仕向けるような表現が用いられる。このように、まず、「すみません」とか「恐れ入ります」のような謝罪を表わす語が用いられ、相手に手間を取らせることに対して悪いと思う自分の気持を表明する。そして「あのう」「ちょっと」というような語で、遠慮がちな雰囲気を表わすことで、やはり、相手に対して悪いと思う気持を暗示する。また、直接依頼を表明することは憚られるので、相手に自分の要求が察してもらえるようなヒントを出す。直接的に言う場合は、「〜ていただく」という謙譲を表わす敬語要素を使い、疑問形にすることによって、相手がノーと言ってもよいことを表わしているような語形を用いる。すべて、聞き手の心情に対する配慮をしていることを表わす表現であり、そういう表現がていねい

な表現であると考える。そして、聞き手との社会的な役割上の関係に差がある場合、つまり、目上の人に対する場合などは、このようなていねい表現を使うことによって、気を使っていることを暗示するわけで、ていねいさに欠ける表現は、そういう社会的距離を了解していないように受け取られ、社会的に不適切とみなされる。

3. 英語における polite な表現について(3)

英語の場合、日本語のように敬語の使用という明確な体系的なものは無いが、やはり、日本語と同様、社会的関係に距離のある目上の人などには、友達に対する時とは言語表現に違いが見られ、敬意を表わすことができる。「あした来るか。」と聞く時は、先生に対しても上司に対しても、友達に対しても、“Are you coming tomorrow ?” であり、全く差は無い。しかし、学生が大学の指導教授に自分の論文を読んでみてもらいたい時には、“ If you wouldn't mind, would you take the time and interest to look over this paper I wrote.”（もしよろしかったら、私が書いた論文を見る興味と時間をもってくれますか。）というふうに、大へん polite に言う場合もある。これを友達に言えば大へん不自然で、わざと冗談に特別な言い方をしていると思われるであろう。友達になら、ていねいに言うとしても、“ Would you mind looking this over ?” というような表現が使われるであろう。この両者をくらべると、語彙の使用自体にはあまり差は見られず、どちらも “would you mind ～” という語法を使って politeness を表わしている。“could you please ～” という表現も、夫が妻に対して依頼をする時でも、上司に対しても使われる。日本語の場合「～てくださいませんか」とか「～ていただけないでしょうか」という語法を使うのは必ず社会的距離を表わすていねい表現になるわけで、その語法自体に「ていねい」な意味が内在しているのにくらべて、英語では語そのものにある特定の polite

な意味が内在していて、それを明示するというより、それが発話される場面の中で、その社会的規範に適合している時 polite になるという場面依存性が強いわけである。

4. 「親しみ」を表わす politeness について

Brown and Levinson は "politeness" について "positive politeness" と "negative politeness" の 2 種類に分けて分析している。"negative politeness" は、聞き手の自由な行為をできるだけ阻害しないように配慮する気持を表わすものであり、敬意表現の中心になるものであると考えられる。日本語のいわゆる「ていねい」の概念と共通するものであり、その表現手段として、間接的な表現をしたり、ぼやかしたり（ex. ' I wonder if ～', ' maybe', etc.)、強制しないように否定的な答を予期するような表現にしたり（ex. "You could not possibly lend me your lawnmower.")、謝罪のことばを使ったり（ex. "Excuse me," "I'm sorry," etc.)、非人称化することによって、つまり ' I ' や ' you ' を使わない形にすることによって、主体を不明瞭にしたり（ex. "It would be appreciated if～")、その他、種々の方法が用いられるが、大部分は、日本語にも見られる手段であることがわかる。

"positive politeness" の方は、話し手が聞き手の人格を知っていて、好ましく思っていて、仲間として遇していることを表わすもので、簡単に言えば、「親しみ」を表わすものと考えられる。すなわち、できるだけ近づこうとする態度を表わすことになる。その手段としては、たとえば、聞き手に対する興味を示すこと（ex. "Goodness, you cut your hair ! … By the way, I came to borrow some flour.")、仲間や、特別な仲であることを表わすような呼びかけ語（ex. ' mate ', ' honey ')や、俗語（ex. ' two bucks = dollars ' ）や、省略形（ex. "Mind if I smoke ?") などを使うこと、聞

き手に対して同意を示したり、同意を予想する聞き方をすること(ex. "You'll lend me your lawnmower for the weekend, I hope.") などに代表されるようなものである。

この "positive politeness"、つまり、親しみを表わす politeness は、「誰もが自分の欲求が好ましいものと思われたい」という欲求 (want) を "positive face" と考え、その概念から生ずる politeness であると、Brown and Levinson は説明している。このような欲求の存在と、それに伴う言語表現の選択は、日本語にも共通するものであるが、そういう表現は、日本語では「ていねいでない表現」、つまり、気を使わない、無配慮な表現とという範疇に入ると考えられる。このことは、単に「ていねい」と 'polite' という語の意味範疇の違いによるものと片付けてしまうことはできない面があるように思われる。英語では、特にアメリカ社会においては、相手に対する親しみを表わすことに強い関心が持たれているのではないか。それに比べると、日本語の方は、人間関係の隔たりを隔たりとして言語的に表わすことに強い関心が持たれている。日本語では、社会的規範からずれて、目上の人に対して、期待される以上に親しさを表わす表現を使うと、場合によっては、慣れ慣れしいとか、横柄であるとか、態度が大きいとか、礼儀を知らないとかいうマイナスのイメージを与える危険性が強いが、多少ていねいすぎることに対しては、あまり強い負の評価になることはない。英語では、過剰な politeness は、冷たいとか、ごきげんとりとか、皮肉っぽいというような、あまりよくない印象を与えがちである。このように、社会的規範に適合する表現を使わねばならないことは、日本語も英語も同じであるが、その規範の重心のあり方によって、その規範からのずれに対しての評価は、その社会・文化によって異なるものと考えられる。

5. ていねい表現選択の要因

話し手が、あるメッセージを伝えるのにどういう表現を選択するかを決める要因となるものは何か。大別すると、(1)聞き手との人間関係、(2)場面（状況 ── フォーマルかインフォーマルかなど、第三者の存在やその数、言語手段、緊急事態か日常的か、等）、(3)発話者の表出態度（表わしたいと思う心的な態度 ── 気取り、怒り、やさしさ、冷たさ、等）、(4)発話内容・目的（あいさつ、約束、依頼、忠告、等）の4つに分けられる。(4) それぞれについて複雑多岐にわたる要素があり、それぞれが相互に関係し合っているわけだが、本稿では、最も大きな要因となる(1)の人間関係の要因について考察することにする。

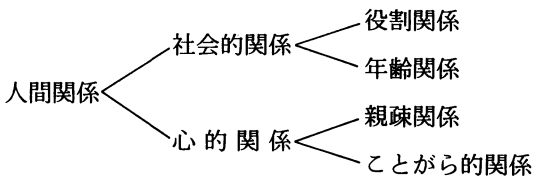
6. 人間関係要因について

ていねい表現選択の要因となる人間関係には、社会的な側面と心理的な側面がある。まず、社会的な側面の方は、たとえば、職場の上司と部下の関係、先生と学生の関係、医者と患者の関係などの役割的なもので、客観的に明確に判断される。身内の関係もやはり社会的なものである。これは一般的には、家族や親族の関係であるが、会社などの場合も、日本では、社外の客に対して社内の者を身内と考え、それが言語表現に反映される。また、客と店員の関係、司会者とゲストの関係、スポーツのコーチと選手の関係のように、限定的な関係の場合もある。これらの関係を社会的役割関係と呼ぶことにする。年齢の関係も、社会的・客観的なものであり、社会的関係の一つの側面と考えることができる。性別もこれに準じて考えるべきかもしれない。

もう一つの側面は、心理的なものであるが、その中でも、親疎関係によるものと、発話内容（ことがら）によって生じる心理的関係とがある。前

者は、親しいか、親しくないか、よく知っているか知らないかというような、聞き手との心的距離感から見た関係で、後者は、たとえば、相手に何かを依頼するような場合に生じる負い目とか気づかいなどに基づく、一時的な心的関係である。

以上の人間関係要因についてまとめると次のように表わされる。



7. 社会的関係と心的関係

日本語の場合、人間関係要因の諸要素の相互関係を考えると、一般的には、社会的関係が心的関係に優先すると考えられる。非常に親しい間柄であっても、大学生が教授に対して「先生、あした来るか。」と言うのは全く不適切であるし、社内で上司である課長に向かって「課長、これがあの書類だ。」と言ったりすることは社会的規範に全く適合していない。社会的役割関係に上下が明確にある場合は、たとえ単なる説明の場合でも、その上下の隔たりを下の者が上の者に対して言語的に明示することが社会的規範として要求されている。年齢関係の上下は役割関係の上下に随伴する場合が多いが、相容れない場合、たとえば、部下の方が明らかに年上である場合、多少、そのことを意識して、年下の者に対するよりていねいな表現になることが多いようである。年齢関係については、時代と共に変化しつつあるところが大きく、流動的であるし、年齢の差の大きさによるところも大きい。

身内（家族・親族）においては年齢関係が必ずしも強く作用しない場合が多い。家族内の言語については、最近は、ふつう、子が親に対してて い

ねいな表現を使うことはあまり見られない。夫婦の間でも、現代の若い夫婦の場合、年齢が違っても、ほとんど親しい平等の立場のことばを使うことが多い。ただし、舅や姑に対しては、ていねいな表現が厳然と残っている場合が多い。しかし、これもだんだんと変化しつつあるようである。

英語の場合、日本語と比べて、社会的関係より、心的関係が優先される傾向が強い。たとえば、ファースト・ネームの使用についても、相手が明確に地位が上の場合は、あまり親しくない場合は敬称と姓を使う（ex. ‘ Mr. Green ’, ‘ Prof. Brown ’）が、ある程度親しくなってくると、ファースト・ネームで呼ぶようになる。(5)

Ervin-Tripp は “*Is Sybil there ?　The structure of some American English Directives*” の中で、詳細に、依頼表現の実態を明らかにしているが、その中で、親しい関係の場合の表現の適切さについて、次のような説明をしている。たとえば、いつも弟がごみを出すことになっているのに、その日は出していないのを見つけて、姉が弟に “Could I trouble you to take out the garbage, Joseph McAllister ?” と言えば、polite ではなく、皮肉に聞こえる。また、若い事務員が、4カ月一緒に働いている同僚に、やっと申請書の仕事が終わったので、それを持って行ってほしいと言うのに、ⓐ “Could you take these back to Emma, please ? ” と言うか、ⓑ “Take these with you.” と言うかという例について、ⓐの方がより polite なように見えるが、ⓐはこの場面では不適切であると言っている。同僚の間で簡単な日常的なことを言うには、ⓑのような命令形を使うことが社会的に期待されており、より親しみが感じられる。ⓐのような表現は、あまり親しくない関係の場合や、地位や年齢が非常に離れている場合であり、親しい同僚に対して、そうでない人に対するような表現を使うことは、冷たく、隔てのある感じを与えることになると述べている。また、‘ polite ’な形式は、仲の良くない仲間の間で、特に心理的な隔てを表わすために使わ

れることがあることにも言及している。

親疎関係だけでなく、ことがらによる心的関係が、ていねい表現の選択の重要な要素になっていることも、日本語より顕著である。そこで、この「ことがら的関係」について、次に少し詳しく述べてみたい。

8. ことがらによる心的関係

聞き手に何らかの行為をすること（又はしないこと）を要求する場合や、聞き手に何らかの行為を申し出る場合、聞き手に対する気づかいが比較的強くなる。そして、その内容が簡単な日常的なことである場合と、厄介な面倒なこと、聞き手にとって好ましくない場合などがあり、それぞれの場合によって、言語表現に対する配慮も変わってくる。

聞き手に行為を要求する場合、一方的に要求を押しつけ、相手がノーということを予期しない語調の表現は「命令」であり、それが行為をしないことを要求する場合なら「禁止」である。禁止も、相手の気持や都合を考慮しない点で一方的であり、命令の一部と考えられる。一方的な要求ではなく、行為をするかしないかを聞き手の意思にゆだねるような調子の要望の場合は「依頼」であり、それが聞き手にとっても好ましいだろうと予想して行為を提案する場合は「誘い」や「勧め」である。これらは表現法の違いに基づく区別で、話し手の実際の心理の方は、相手にノーとは言わせない命令の気持であっても、聞き手との人間関係の配慮により、依頼の表現になったり、勧誘の表現になったりする。その配慮には、相手が誰であるかという要因と共に、どんなことがらを相手に要求するか、その要求したい行為を相手がどのように受け止め、実行してくれるか、つまり、どういう表現をすると、発話行為の目的が達成されるかというようなことを考えるという要因がある。

友人の家に招かれて食事をしている食卓で塩をとってほしいという時には、聞き手の食事を中断させるわけであるから、英語では、“Pass me the

salt.” というより “Could you pass me the salt, please ?” という方がよりていねいであり、この表現は、どんな目上の人に対してでも適切な表現である。もし、タイプを頼むような場合なら、もっと面倒なことを頼むわけであるから、社会的関係は同等の人に対しても “Would you mind typing this ?” というようなもっとていねいな表現になる。日本語の場合は、社会的関係が同等の人に対しては「しょうゆ取って。」または「しょうゆ取ってくれる？」ぐらいであるが、目上の人に対してなら「すみません、ちょっと、しょうゆを取っていただけませんか。」というように非常にていねいな表現が用いられる。これは、もっと面倒なことを頼む場合の、「すみません、ちょっと、これを山田さんに渡していただけませんか。」というような表現とあまり変わらない。もちろん、もっと厄介なことを頼む場合なら、「申し訳ないんですが」とか「もしできたら」などという配慮の気持を表わすことばが付け加えられる。しかし、どちらかと言えば、社会的関係の要因が、ことがらによる関係の要因よりも強く作用している。しかし、英語の場合は、何かを頼むことによって相手に面倒をかけることに対する配慮の方が要因として強く作用しており、たとえ、社会的関係が同等であっても、かなりていねいな表現が使われることが多い。

聞き手にとって好ましいと思われることを申し出たり、頼んだりする「勧め」や「誘い」や「申し出」の場合の表現では、表現の語法自体に日・英語の配慮の重点に差が見られる。日本語で「コーヒーはいかがですか。」とか、「コーヒーをお入れしましょうか。」とか、「コーヒーでもお飲みになりませんか。」と言うような場合、英語では “Would you like to have a cup of coffee?”というふうに、“would you like～”という表現法が一般に用いられる。“How about a cup of coffee?” という言い方もあるが、これはかなりくだけた表現である。また、人を家に招く時も、ていねいに言う場合は、“ I was wondering if you would like to come to my home for supper.”（あなたが私の家に夕食に来

たいかしらと思っていたのです。）というような表現が使われ、相手の気持ちについて聞いたり、それを配慮したりしていることを表わす表現法が主に用いられる。親しい間柄でも、"If you like, please stop by for a drink."（もし来たかったら、ちょっと寄って下さい。）というように、聞き手に、来ることを押しつけず、相手の好みに任せることを表明する方が好まれるようである。日本語では、相手の好みや気持ちに直接言及することは、目上の人に対してはあまりなされない。「コーヒーをお飲みになりたいですか。」とか「私の家に食事にいらっしゃりたいですか。」という表現は、ことば自体は敬語を用いていても、ていねいな表現とは言えず、不適切である。社会的関係が同等の人にでも「家に食事に来ませんか。」というのが普通の誘いであるし、目上の人になら「来ていただけませんか。」というように、その人が来ることが話し手にとってプラスのこと（嬉しいこと）であるからお願いするという依頼に近い、遠慮の気持を暗示する表現が使われる。「よろしかったら」ということばを付けるのも、気持ちとしては「あなたが来たかったら」という意味を含んでいるが、表現としては「もし都合がよかったら」ということを聞いているわけである。つまり、話者の方の遠慮的態度を表明することが中心になっているとも言える。

依頼の表現でも、"Would you mind doing this for me?" という時の "would you mind" という表現法は、相手の気持をきく表現になっていることでもわかる通り、英語の方は、全体的な傾向として、相手の好みや気持ちを配慮の中心としていると言えよう。

9. むすび

本稿では、まず日本語のていねいな表現の語法とその配慮について考え、英語の polite な表現では、politeness の意味が、語法自体に内在するというより、場面での運用によって顕在化するという場面依存性が強いこと

について述べた。そして、ていねいな表現というのは、発話場面において、社会的に期待されている規範に適合しているかどうかによるものであるという観点から、日本語の場合、英語の場合、それぞれ、どういう規範に比較的重点が置かれているかを考察した。日本語では、社会的な役割や年齢関係の違いを隔たりとして表明することに重点があり、話し手がその規範に適合しない表現をすると、聞き手に強いマイナスのイメージを与えることになる。英語では社会的関係による隔ても表現するが、それより、聞き手に対する親しみを表わし、より近づこうとする表現態度に、日本語以上に社会的規範の重点がある。それで、その「親しみ」を表わす規範からずれることは、聞き手に対して強いマイナスのイメージを与えることになるわけである。

これに関連して、ていねい表現選択の要因のうち人間関係の要因についても、日本語と英語をくらべると、日本語では、社会的関係、すなわち役割による関係や年齢による関係がその要因として強く働き、心理的な関係が、社会的関係より優先されることは少ない。一方、英語では、心理的な関係、すなわち、親疎の感情や、発話内容によって生ずる関係が、ていねいな表現を選択する要因として強く作用し、社会的関係より優先的に作用することが多い。また、語法的に見ても、日本語の方は話者の遠慮的な態度を表わすことが中心的であるのに対し、英語の方は、相手の好みや気持ちへの配慮が中心的であるという違いが見られる。

結局、日本語にも英語にも同じような対人関係の配慮、気づかい、感情があり、似たような表現法上の手段があるわけだが、社会的な規範の上で、どこに重点が置かれているか、何をより強く明示することを重要視するか、どういう規範からの逸脱がより不適切というマイナスのイメージが強いかが、日本語と英語では異なっているところがあることがわかる。

しかしながら、これはあくまで巨視的にみた相対的な違いであって、個

人によっても、特定の場面状況などによっても、その規範の重点は変化するものである。本稿では人間関係の側面の一部だけを取り上げたが、もっと広範な多様な関係がありうるわけであるし、また、発話は必ずある場面の中で、感情や意図をもってなされるものであるから、人間関係の側面だけを切り離して考えることは、発話の実態を描くことにはならない。今後、他の側面についても考慮しながら、もっと綿密な、広範な観察と検討が必要である。また、個人差、地域差、年代差などをどのように考えるべきか、標準となる表現をどうやって抽出するのかなど、多くの問題が残されている。そして、何を言うことがていねいかという表現法以前の問題も今後の課題である。

注

(1) ヤコブソンは言語の機能の6分類の中で phatic function（接触本位の機能）を挙げており、時枝誠記は機能の3分類の中で社交的機能を挙げているが、人間関係機能もこれらに類するものと考えられる。

(2) アメリカ英語と言っても、地域、階層、人種、その他さまざまな社会的要素によって大きな差が見られるので、何をもって、一般的・標準的と言うかは厳密には規定できない。尚、インフォーマントとしては、在日のアメリカ人大学教授、大学生、高校生数名の協力を得た。

(3) ‘ polite な表現 ’ という用語は、英語の polite と日本語のていねいという語に意味のずれる部分があることから、英語をそのまま使用している。

(4) 南不二男は「現代日本語の構造」(1974) の中で、敬語選択の条件として、言語外の世界のものごと（外的条件）について、次のものをあげている。

1.人間関係の条件　2.ことがらに関する条件　3.状況に関する条件

(5) この呼称詞に関する考察は久野暲「英語圏における敬語」(1977) に詳しく述べられている。

主な参考文献

(1) Brown, P. and Levinson, S.: “Universals in Language Usage: Politeness Phenomena”, *Questions and Politeness*, E. Goody (ed.) Cambridge University Press, 1978, 56-324.

(2) Ervin-Tripp, S: "Is Sybil There? The Structure of Some American English Directives", *Language in Society* 5, 1976, 25-66.

(3) Scarcella, R. and Brunak, J: "On Speaking Politely in a Second Language", *International Journal of Sociology of Language* 27, 1981, 59-75.

(4) 大杉邦三「英語の敬意表現」大修館書店　1982

(5) 久野暲「英語圏における敬語」(『岩波講座日本語・4　敬語』) 岩波書店 1977, 301 - 331

(6) ネウストプニ、J.V.「言語行動のモデル」(『講座言語・3　言語と行動』) 大修館書店　1979

(7) 林四郎「言語行動概観」(同上)

(8) 南不二男「現代日本語の構造」大修館書店　1974